慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	田園のうた
Sub Title	Poetry of the paddy
Author	川村, 晃生(Kawamura, Teruo)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1994
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.65, (1994. 3) ,p.50- 72
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	檜谷昭彦, 佐藤一郎両教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00650001-0050

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

田園のうた

川村晃生

田や畑は、時代を問わず、人間が生活を営む上で欠くことのできない場として、重要な環境を形づくってきた。そこでは水稲や麦を中心とした様々な穀物や蔬菜が生産され、人間の生命を育み続けてきた。しかし田園は、人間にとって単に糧食を供給する場としてのみ機能したわけではなかった。それは人間の精神性とも密に関わりつつ、人々の心にもまた栄養を与え続けてきたのであった。たとえば田園の文学的形象という営為は、その顕著な例の一つとして数えることができるであろう。

本稿ではそのような観点から、田園という場と詩歌との関係を捉え、詩歌という文学の中で田園がどのように把握され歌われてきたのかを考察してみたいと思う。以下では、田と畑という二つの場の文学的差違を明らかにするために、ひとまずそれぞれの場に分って検討を加えていくこととしたい。

一

まず田の歌の考察から始めたい。これまでに平安時代の田の歌を、主に八代集の展開の中に位置づけられたものとして、臼田昭吾氏「平安朝農事歌考（上）―「田」素材を中心として」（『弘前大学国語国文学』10・昭63・3）がある。氏はその中で、平安和歌と『万葉集』との関係を大きな視点として設定され、王朝和歌における田の歌の変遷を『万葉集』をキイとして説こうとされている。まず全体の流れとして、田の歌が『万葉集』では一六種六〇首見られるのに対し、七代集までは三～六種四～一四首にすぎず、『新古今集』に至って一三種二九首と盛返してくる点を述べられる。また素材的には『後拾遺集』で『万葉集』にない素材が現われており、その傾向は『金葉集』を経て『新古今集』において増大することを指摘されている。また『万葉集』にあって八代集には見られなくなるものとして、「刈りばか」「をろ田」「鹿猪田」「かきつ田」などがある一方、『万葉集』の素材で八代集において復活するものもあることを指摘される。たとえば「門田」は、『万葉集』以後、『金葉集』『千載集』『新古今集』において目覚しく復活するが、これを内容的に見れば、万葉における人事的詠法から叙景的詠法に変化しており、そこでは源経信及びその子俊頼を中心とする貴族たちの山荘経営が深く関与していることを述べられている。また「秋田」は、『万葉集』及び三代集においては相聞歌の序として農村生活をスケッチしているのに対し、『後拾遺集』以後においては、これもまた客観的な叙景の対象として変化していくことを述べられ、「早田」もこれに類同する傾向を示す点を指摘されている。さらに「荒木田」「荒田」「荒小田」の特異な変遷についても述べられるが、総じて『後拾遺集』及び『金葉集』の時点における田の歌の叙景詠への質的変化を押えられる点において、おおむね首肯されるものと言えよう。

ところでこの臼田氏の論述の中でも注目されている経信の、たとえば「夕されば門田の稲葉おとづれて蘆のまろ屋に秋風ぞ吹く」（家集一〇三）などに代表される田の歌は、確かに和歌史的に見て、量的にも質的にも顕著な変化を示し得ている。そしてそれを、単に『万葉集』や『古今六帖』『好忠集』といった先行の和歌作品との関連からだけでなく、漢詩文との関わりから説こうとされたのは久保田淳氏であった。氏は「源経信の和歌について」（『山岸徳平先生頌寿　中古文学論考』昭47、有精堂）において、経信の田への視点が客観的かつ審美的である点を述べられ、それが『和漢朗詠集』（巻下）に立項されている「田家」（当然『新撰朗詠集』にも存する）の中に収められる、

碧毯線頭抽二早稲一　青羅裙帯展二新蒲一

といった白楽天の詩句や

野酌卯時桑葉露　山畦甲日稲花風

といった紀斉名のような本朝の詩人たちの作品と密に関わりつつ、同時に経信自身が、たとえば、『本朝無題詩』（巻七、田家）において、「秋日田家眺望」の題の下に、

晩趁二田家一欲レ去不　句牽二臨眺一暫淹留
路過二郊外一残花悴　宅枕二汀心一臥柳秋
雲鎖二茅簷一山雨灑　嵐披二松戸一野煙幽
洲蘆波上月明夜　只伴二漁翁一棹二釣舟一

と詠じていることとも無縁ではないことを述べられている。そしてそれに続けて、経信と中国の詩人たちとの質的相違についても論及されるのだが、ともかくも経信の田の歌が漢詩文との関係から考察されるべきことは明らかと思われる。

一方稿者は、経信の田の歌を好忠のそれとの関連から捉えようとしたことがある。すなわち拙稿「私家集と歌壇—堀河院歌壇をめぐって—」（『王朝私家集の成立と展開』——和歌文学論集4、平4、風間書房）において、堀河百首の作者たちが農事や田の歌を詠むに際して、『万葉集』を背景とした好忠詠、すなわち王朝化された万葉としての好忠詠を念頭に置いていたであろうことを述べ、その受容史の先蹤として経信が位置していたことを指摘したのであった。すなわちすでに久保田氏が触れられた如く、経信の「門田」の先例として、『万葉集』以後においては、『好忠集』（二〇一）の「我が宿の門田のわせのひつち穂を見るにつけてぞ親は恋しき」の一首が認められる、といった点が具体的に指摘し得るのである。そしてそれはさらに、すでに安田純生氏が「経信の母について」（『樟蔭国文学』14・昭51、9）において述べられた如く、経信母における好忠受容の問題とも重なるものであった。すなわち経信母が自身の作品の中に好忠的表現を多く取り入れるなどして、好忠を高く評価したことが、たとえば経信への和歌教育に反映され、経信は早くから好忠に対して注意が向けられていたと考えられるのである。経信は好忠を積極的に受容する素養が、若年時から培われていたと言えよう。そしておそらくこの問題は、久保田氏が指摘された経信の田の歌における漢詩文の問題と同程度に、考察が加えられるべきものであると言ってよいであろう。

そこで本稿では、好忠の田の歌を再検討し、そこに内在する問題を考察した上で、さらにそれが和歌史とどのように関わるのかを論じてみたいと思う。

二

実際に好忠詠の中には、実に多様な形で田の歌が存在する。それらを大別すると、稲の種類と田の種類を詠んだもの

に分つことができるが、まず稲の種類を詠んだ歌から検討を加えてみよう。

58わさ苗を宿もる人にまかせおきて我は花見るいそぎをぞする（毎月集、二月終）

179我がまもるなかての稲ものぎはおちてむらむら穂先出でにけらしも（同、七月中）

232荒げなるおくての稲をまもるまに萩のさかりはすぎやしにけむ（同、八月中）

の三首には、早稲苗、なかての稲、おくての稲の三種の稲が詠まれている。

58の「わさなへ」は、『日本国語大辞典』では本首を用例として、「苗代から田に移し植える頃の苗。さなえ」と説明する。一般に早生種の稲としては、後述の如く早稲（はやわせ）という用語が存するから、「わさなへ」は右の如く単に早苗の意とも解し得ようが、「わさなへ」という呼称からは、やはり稲の中で早く成熟する早稲の種の苗という語感が強いように思われる。後述する早稲田（わさだ）の例から見ても、再検討の要があるかもしれない。この語は、『万葉集』などの先行作品に用例が見えず、後続の作品にもほとんど例が見えないが、僅かに「恵慶百首」（夏）の中に、

219わさなへも植ゑ時すぐる程なれやしでのたをさの声はやめたり

という同時代例を検出し得る。「好忠百首」→「恵慶百首」→『毎月集』という順に成立したとすれば、この語は恵慶が初めて着目したものと考えられるが、速断は躊躇される。しかしいずれにせよ、両首の間に影響関係は想定できよう。

次に197の「なかての稲」は、早生と晩生の中間のもので、これも他に用例が見当らない。また232の「おくての稲」は、晩生の稲で、これは比較的例が多い。『古今集』（哀傷、八四二、貫之）に、

朝露のおくての山田かりそめに憂き世中を思ひぬるかな

の一首が存するほか、『貫之集』『躬恒集』以下の私家集類に「おくての稲」として数多くの例が見出される。同時代例

としては、「重之百首」（秋）に、

274白露のおくての稲も出でにけりかりくる風はむべも吹きけり

の一首がある。従って「おくての稲」は、すでに歌語として定着し、歌人たちの使用素材の中に入っていたものと見られるが、先の「わさなへ」「なかての稲」などは、好忠ら初期百首作者の創意に拠る部分が大きかったものと思われる。

一方こうした好忠の稲の種類への着目は、稲の詠法の先例として後代に影響を及ぼしたふしも見受けられる。たとえば「堀河百首」には、

265わぎもこが門田に植うるはやわせの苗代水をいかに引かまし（苗代、基俊）

のほか、「室のはやわせ」（早苗、四〇七、仲実。同、四一四、肥後）など、「はやわせ」の語が見え、また晩生の稲である「おしね」の語も、

232秋かりし室のおしねを思ひ出でて春ぞたなゐに種もかしける

の一首を初めとして、「おしねかる」（不被知人恋、一一三七、公実）、「おしねのひた」（田家、一一五一、仲実）などに見出される。前掲の別稿に述べた如く、堀河院歌壇の歌人たちが『好忠集』を愛読し、それを積極的に受容していたとすれば、彼らのこうした稲の種類を詠む方法は好忠に学ぶ所があったと見てよいであろう。その意味で好忠は、田の歌の詠法の一つを開発し、確立したのであった。

次に好忠の田の種類を詠んだ歌に目を転じたい。好忠が自身の作品の中に詠んだ田の種類は、稲の種類以上に実に多様である。各一例ずつを左に示そう。

20ねせり摘む春の沢田におり立ちて衣のすそのぬれぬ日ぞなき（毎月集、正月中）

39このめはる春の山田を来てみれば霞の衣たたぬ日ぞなき（同、二月初）
51荒小田の去年のふるあとの古蓬今は春べとひこばえにけり（同、二月中）
60花により妹が早稲田に手もふれでふるすながらに暮らす頃かな（同、二月終）
145小山田のみだえせしよりあめにます岩との神をねがぬ日ぞなき（同、五月はて）
189遠山田こぞにこりせず作りおきてもるとせしまに妹はたはれぬ（同、七月初）
201我宿の門田のわせのひつち穂を見るにつけてぞ親は恋しき（同、七月中）

ここには、沢田、山田（小山田）、荒小田、早稲田、遠山田、門田などが詠まれているが、このうち山田は他に一五九、二二〇にも、早稲田は三八四にも、小山田は一四五、四五五にも、また遠山田は二〇七、三九六にも検出される。

これらの用語の先行作品における用例を見てみよう。まず荒小田、山田、小山田は、『古今集』や『後撰集』に見出されるもので、さして特異な用語ではなかったと言える。また早稲田も、『万葉集』に五例（一三五三、一五六六、一六二四、一七六八、二二二〇）が検出されるほか、『貫之集』の中にも、

田守る庵ある所
153かりほにて日さへへにけり秋風にわさ田かりがねはやも鳴かなん

という一首のほかにもう一例が見え、比較的耳馴れた歌語であったようである。しかしながら沢田、遠山田、門田は、いささか事情を異にしている。まず沢田は、他の作品中に先例が見えず、僅かに、やや遅れる例として『大弐高遠集』の中に、

240をこちしに沢田かりつむあまなればいねども人のなにかいとはむ（沢べの田かる）

の一首が見え、下って「堀河百首」中に、「菫菜」（二四七、源顕仲）及び「早苗」（四〇七、仲実）の項に各一首ずつ見出される。さらに下って、『忠盛集』の、

3うら若き沢田のこせりたがために人めもしらずいそぎつむらむ

及び『山家集』の、

981荒れにける沢田のあぜにくららおひて秋待つべくもなきわたりかな

などの例が見出されるが、とくに忠盛詠は沢田の芹摘を詠んでいる点において、好忠詠と共通している。沢田が好忠の創意に拠る語であるかどうか速断はできないが、好忠の沢田詠が後代に或る程度の影響を及ぼしたであろうことは、想像してよいであろう。

次に遠山田は、『躬恒集』に見えはするものの、同首は『校本凡河内躬恒全歌集と総索引』（滝沢貞夫、酒井修編、笠間書院、昭58）に内閣文庫本による補遺として存するもので、むしろ同首を収める『古今六帖』（第二、山田）の、

969遠山田もるや人めのしげければほにこそいでね忘れやはする

との関係を重視すべきであろう。その点では、『古今六帖』の編者の可能性が考えられる源順の家集中に、

田の中に水ひくをのこあり

214遠山田種まきおける人よりもゐせきの水はもりまさるらむ

と見えていることは暗示的である。後に「千五百番歌合」（六〇八番右、忠良卿）の、

遠山田稲葉ほのかに雁鳴きて雲のたえまにみか月の影

の一首を初めとして、平安末期から鎌倉期にかけて遠山田が頻りに詠まれるが、その基盤には『好忠集』を据えて考え

てよいのかもしれない。

また門田については、すでに臼田氏の検討があり、稿者も別稿において少しく触れたので、多くを述べないが、簡約して言えば、万葉語である門田を好忠が摂取し、それを経信がさらに既掲の自作に取り込んだという経緯を想定してよいであろう。そしてその経信詠によって『金葉集』に復活した門田は、以後の和歌史の表舞台を飾ることになったのである。

このように好忠の田の歌は、その用語の豊富さにおいて実に多彩であると言ってよいであろう。好忠はまさに田園詩人的な面影をたたえた歌人であった。そしてその田園に向かう彼の態度はと言えば、きわめて農民的な立場に立つものであり、農民の視点から田を見る歌が圧倒的に多いと言うことができよう。たとえば既掲の、58・197・232・60・189・145などはその典型例である。

ではこうした好忠の詠歌態度は、何に拠るのであろうか。農民的視点からの詠法と言えば、まずただちに『万葉集』との関係が考えられよう。別稿でも少しく触れたが、『万葉集』の中に収める、

1353 石の上ふるのわさ田をひでずとも縄だにはへよ守りつつ居らむ（巻七、作者未詳）

2221 我門に守る田を見れば佐保の内の秋萩すすき思ほゆるかも（巻十、作者未詳）

などの詠歌を読めば、好忠の詠歌ときわめて近似したものであることが理解されよう。その点では、これは好忠の万葉風の摂取という問題に帰して考え得るように思われる。しかしながら、どうも事はさほどに単純ではないらしい。近時松本真奈美氏は、「曾禰好忠「毎月集」について—屏風歌受容を中心に—」（『国語と国文学』68巻9号・平3、9）において、好忠詠における屏風歌からの影響を考察されているが、田に関する詠の中でも、たとえば「わさなへ」を詠んだ既掲の

58番歌「わさ苗を宿もる人にまかせおきて我は花見るいそぎをぞする」の一首が、『拾遺集』（春、四七、斎宮女御）の、

承平四年中宮の賀し給ひける時の屏風に

春の田を人にまかせて我はただ花に心をつくる頃かな

という一首の影響下にあるであろうことを指摘され（これについては『標注曾丹集』が早くに指摘している）、また『毎月集』の、

ほたちする秋は来にけり下りそぼち早苗つかねし袖もひなくに（七月初、一八八）

の詠が、『貫之集』（二六一）の「京極中納言屏風歌」中の秋歌の一首、

かへし袖まだもひなくに秋の田をかりがねさへぞ鳴きわたるなる

に拠るであろうことを述べられている。

この好忠と貫之屏風歌の関連については、さらに久保木寿子氏「初期百首と私家集―好忠百首を中心に」（『王朝私家集の成立と展開』―和歌文学論集4・平4、風間書房）によっても指摘されるところだが、以上からすれば一見万葉的とも思える農民的視点に立っての田の歌の方法は、平安時代に入っても屏風歌の詠法の中に生かされていたのであり、好忠の同種の詠草も万葉と屏風歌という複合的な要因を背景として成立したことを、併せて考えねばならないであろう。その意味では、従来の好忠＝万葉という単一な図式は、修正の要があるかもしれない。

いずれにせよ右に見た如く、好忠の田の歌はその多くが農民的世界に身を置くことによって詠まれたものであり、それが久保田氏をして「多分に土くさい」と評せしむる所以ともなったのである。しかしながらそのような中にあって、注目すべき一首が存する。それは『毎月集』（七月初、一八七）の秋部巻頭に配され、後に『詞花集』秋部巻頭をも飾る、

山城の鳥羽田のおもを見渡せばほのかに今朝は秋風ぞ吹く

という一首である。この一首は、後の「夕されば門田の稲葉おとづれて蘆のまろ屋に秋風ぞ吹く」という経信詠と同質の詠と言え、純粋な田園叙景詠の先蹤と見做してよいであろう。鳥羽田を見渡す作者が、肌に秋風を感じながら、秋の到来を実感しているこの一首は、右に見てきた農民的視点からの田園詠とは全く異質の世界を提示していると言ってよい。

では好忠は、いかにしてこのような詠風の方法を獲得し得たのであろうか。多分ここで考えられるべき問題は、漢詩文である。久保田氏は前掲論文において、『和漢朗詠集』の田家の項に配列される漢詩句の数句を指摘されたが、早く『千載佳句』にもそれに重なりながら同類の数句を認めることができる。すなわち、

5 氷消二田地一蘆錐短　春入二枝條一柳眠低（早春、元、寄楽天）

45 碧毯線頭抽二早稲一　青羅裙帯展二新蒲一（春興、白、春題湖上）

の二句がその典型と言えようが、こうした中国の詩人による田の叙景句が一〇世紀後半の本朝の詩人たちの注意を惹いていたことは、注目に値しよう。そしてそれを規範として、本朝の詩人たちも同種の作品を詠み始めている。たとえば『和漢朗詠集』（田家）に収める、

567 野酌卯時桑葉露　山畦甲日稲花風　斉名

568 蕭索村風吹レ笛処　荒涼隣月擣レ衣程　相如

という二詩句は、『和漢朗詠集私注』によって「田家秋意」の詩題の下に詠まれたことが確認される。また『新撰朗詠集』（田家）にも、源順の「田家作」、及び高岳相如の「田家秋意」の詩句が散見される。すなわち一〇世紀後半の本朝の詩

人たちにとって、田は彼らの詩情を託すにふさわしい場として確立しつつあったのである。それが好忠の詠歌に影響を与えなかったはずがない。わけても源順は、好忠と昵懇の仲であった。とすれば経信の漢詩句に基づく田の叙景描写の方法は、早くに好忠において試みられ始めていたということになる。前に好忠の経信への影響についていささか触れたが、右からすれば、好忠は単に詠風のみならず、漢詩文依拠という方法をも含めた形で、経信に影響を与えたと見ることができよう。

ところでこうした好忠の田の歌は、和歌史の表舞台をも塗り変えることとなった。すなわち『後拾遺集』における農事・田園詠の登場である。まず同集夏部には、

早苗をよめる　　曾禰好忠

204 みたやもり今日はさ月になりにけり急げや早苗おいもこそすれ

永承六年五月殿上根合に早苗をよめる　　藤原隆資

205 五月雨に日も暮れぬめり道遠み山田の早苗とりもはてぬに

という二首の早苗詠が存する。前者は好忠自身の詠だが、いずれも農民的世界そのものを活写する点において、既述の屏風歌的手法に共通するものと言えよう。

一方同集秋部下には、三首の秋田詠が存する。すなわち、

後冷泉院御時后宮の歌合によめる　　伊勢大輔

368 秋の夜は山田の庵に稲妻の光のみこそもりあかしけれ

師賢朝臣梅津の山庄にて田家秋風といふ心をよめる　　源頼家朝臣

369宿近き山田のひたに手もかけで吹く秋風にまかせてぞ見る

土御門右大臣家歌合に秋の田をよめる　　相模

370秋の田に波寄る稲は山川の水ひき植ゑし早苗なりけり

の三首だが、ここには農民的視点と叙景的方法とを混在させながら、秋田という新たな風景が勅撰集を飾り始めた様相を、如実に看取することができる。そして369の頼家詠（既掲の「夕されば」の経信詠も同じ折のものである）の詞書に認められる如く、彼らは「田家秋風」という漢詩人たちの詩題と同趣の歌題を設定することで、田の歌の開発に努めたのであった。それは漢詩文的世界を基盤に据えるという点において、好忠と共通の方法であったと言えよう。詩文に基づく好忠の田の歌と、『和漢朗詠集』における田家の項の設定は、『後拾遺集』の季節詠に新たな素材を提供したのであった。そしてこの田の歌は、夏の早苗と秋の田とを問わず、以後の勅撰集の季節詠の一郭を築くことになる。それについてはすでに臼田氏が述べられるところでもあるので、ひとまずそれに譲りたいが、こうした勅撰集における田の歌の生成と展開の基盤には、『万葉集』や屏風歌及び漢詩文を背景としての好忠の積極的な田に向かう文学的姿勢があったことを、認識しておく必要があると思うのである。

三

こうした田の詩歌の展開に比して、畑の詩歌はどうであったのだろうか。まず畑の漢詩について概観しておきたい。畑は漢語で言えば、圃または園がこれに該当しよう。辞書の上では、圃は菜を植え、園は木を植える所という区別が存するようだが、それが詩人たちに厳密に使い分けられていたかどうかは明らかではない。しかしいずれにしても圃園は、

漢詩の素材としてはまことに乏しかったと言わざるを得ないのである。最初に中国の例を見てみよう。

『芸文類聚』は巻六十五（産業部上）に園と圃の項を設け、『初学記』も巻二十四（居處部）に園圃の項を設けるが、余り見るべきものはない。また『白氏文集』にあたっても、園や圃の或る風景が白楽天の詩心を動かし、それが一篇の詩として文学的に結晶しているような例は、ほとんど認められないのである。いわばそれは、自身の周りをとり囲む一つの環境としての素材的意味を持つにすぎない。たとえば薬圃は、

薬圃茶園為二産業一
野麋林鶴是交遊（巻十六、重題、〇九七七）

春抛二紅薬圃一　夏憶二白蓮塘一（巻十八、郡齋暇日憶廬山草堂〜、一一一一）

等と詠まれるが、それ自体が決して文学上のテーマとなるわけではない。白楽天にとって圃園が意味を持ち得たのは、僅かに左のような例においてであろうか。すなわち『白氏文集』（巻十五、〇八〇七）の、「渭村退居寄二礼部崔侍郎、翰林銭舎人一詩一百韻」の中で、

隙地治二場圃一　間時糞二土疆一

とか、或いは、

園菜迎レ霜死　庭蕪過レ雨荒

という如く、白楽天の退隠的生活を形成する小景の一素材として、圃園は詩的世界を構成したのである。『白氏文集歌詩索引』に拠っても、田と園や圃の使用例の間には、その語数において圧倒的な差違が認められ、田園の風景は田によって代表されていたようなふしがある。畑は中国の詩人たちの心を、さほどに刺激しなかったと見てよいであろう。

では翻って本朝の詩人たちはどうであったろうか。実は我が国の漢詩文学を一瞥しても、大勢は中国の場合とさほどに異ならないのである。僅かに『文華秀麗集』（巻上、奉和春日江亭閑望一首。仲雄王）に、

老圃鋤二遅日一、商帆艤二早霞一

と、春日ののどかな田園の風景を、田畑を鋤く老農にスケッチした詩句は存するが、それは圃園の詩の主流を形成するには至らなかった。たとえば『本朝無題詩』を繙くと、

茶園薬圃為レ誰設　秋月春風教レ我悽（巻七、旧宅。過二雍州旧宅一。中原広俊）

の如く、既掲の白楽天の詩句「薬圃茶園為二産業一」を意識した表現が存したり、また

灌園生計宜追レ跡　甘従二官遊一久属レ文（巻七、山家。夏日山家即事、藤原周光）

とか、

林霞遶レ舎舒還巻　山雀狎簷去又来
莫レ道幽棲生計乏　灌園自作二送レ年媒一（巻七、山家。山家春意。藤原周光）

といった詩が存しており、畑の耕作を郊外の退隠生活を叙する上での材料として用いているものが見出されるが、それとてごく僅かな例を数えるにとどまる。しかもそれは、白楽天の園圃への詩的態度に倣うものがあったと言えよう。従って畑という場は、漢詩文においては田ほどに詩人たちの注意を惹かず、大きな意義を担うことがなかったと言ってよいであろう。それは『和漢朗詠集』の中に、田家に対して園圃といった項目が立てられなかったことからも、如実に窺い知ることができると思うのである。

四

では歌人たちにとって、畑の風景はどのように映っていたのだろうか。しばらくこの問題に即して検討を加えてみたい。

しかしながら和歌における畑というテーマもまた、漢詩文の場合と同様に、田に比して決して豊かな展開を遂げたわけではなかった。また田の歌の如く、漢詩文と密接に関わって詠まれたふしもなく、畑は和歌文学の中でいわば独自の風景を形づくっていったのである。畑の歌と言えば、誰しもがすぐさま想起する西行の歌がある。すなわち『新古今集』（雑中、一六七六）に、「題しらず」歌群の一首として収められる、

古畑のそはの立つ木にゐる鳩の友呼ぶ声のすごき夕暮

という詠である。古く荒れた畑の中で凄凄たる鳩の声を捉えるこの一首は、その荒涼とした風景の実感において、近代の短歌作品にも比肩し得る程にすぐれた技を示している。そしてこの古畑に関して、従来の解釈を越えて、新たな具体的イメージを賦与されたのは松岡心平氏であった。すなわち氏は「西行の「ふるはた」の歌」（『日本古典文学会々報』一一五号、平元）において、我が国の農作史の展開に触れつつ、この古畑が急斜面の焼畑であるという解釈を提示された。氏の御説をここで再び繰り返す暇はないが、農作史研究の成果をふまえた氏の立論は、実に説得力に富むと言えよう。古代における焼畑については、畑井弘氏の「奈良・平安時代の焼畑農業」（『律令・荘園体制と農民の研究』、一九八一年、吉川弘文館）に詳しく、焼畑は山野を耕地化する代表的な方法であったらしいが、実際「畑焼く」という所為と風景は、歌人たちの眼にも印象的であったようだ。松岡氏も挙げられる、

かた山に畑焼くをのこかの見ゆるみ山桜はよきて畑焼け

という藤原長能詠（『拾遺集』、雑春、一〇五二）は、その古い例であろうが、他にも、

山もとに畑焼く里の夕暮も遠きは細きけぶりとぞ見る（新撰六帖、四七九、信実）

紅葉ばを畑焼く山とながむらむ土佐のとわたる秋の舟人（草根集、四八三九／渡紅葉）

嵐吹く松を煙にあらはして畑焼く山や蔦の紅葉ば（松下集、二一三五／蔦風）

などと見える。後二例は焼畑が紅葉の比喩として用いられているにすぎないが、こういう比喩が成立し得る程に「畑焼く」景は一般的でもあったのであろう。とくに正徹詠に見られる土佐の地名は、『連珠合璧集』に畑の寄合語として土佐国とあることに言及される松岡氏の御指摘とも合致して、興味深い。そしてさらに同氏は、『今川氏真詠草』中の、

ふる畑を焼くや煙の年こえてそのまま峰に霞たなびく

の一首が、古畑イコール焼畑の例であることを指摘されて、他の

古畑の桑の若葉のこきたれてこはいかにとやねのみなかるる（新撰六帖、二五〇七、為家）

今日いくかなほ五月雨のふる畑をなだれてうづむ山の椎柴（為尹千首、二四八／山五月雨）

古畑ものこさずうちの郡より昔にかへる御代ぞしらるる（同上、九八八／寄郡祝）

なども、焼畑であろうことを推定されている。右の例以外には、僅かに

春日さす山の尾上の古畑にめぐむ若菜をつむや里人（安嘉門院四条五百首、二一一）

の一首が見出されるが、これも同様に解してよいであろうか。また明らかに焼畑を古畑と呼んだであろうことを推測せしめる例として、

焼きすてし古山畑のかたきしにたてるやからき我身なるらむ（現存六帖、三八八、正三位知家）

という一首がある。ここに詠まれる古畑に残る立木は、西行詠を考察する上でも参考となろう。

ところでこうした焼畑への明確な認識は、松岡氏が引かれる黒田日出男氏（「中世の『畠』と『畑』―焼畑農業を考えるために―」『日本中世開発史の研究』、一九八四年、校倉書房）の、中世における畑と畠の区別という指摘にはっきりと示されている。それはたとえば黒田氏が引かれる『大漢和辞典』の、「草を焼いて開墾した陸田、火田の義」の畑と、「白と田の合字。白は水無くて乾いている義で、乾田の義とする」という畠との、辞書的意味の区別にも見られるが、文学作品におけるその最も顕著な例としては『夫木抄』の両者の扱いを挙げ得るであろう。すなわち『夫木抄』は、その巻第二十四（雑四）に「畠」の項を設け、

播磨なる飾磨に作る藍ばたけいつあながちのこぞめをか見ん（一〇一七三、信実）

いたづらに荒るる園生のはたけ芹わびしげにてもある世なりけり（一〇一七四、正三位知家卿）

の二首を挙げる一方、これに接して「畑」の項を設け、さらに細分して「とほ山はた」「そののふるはた」「やけ山はた」「はた」「やけはた」の項を列挙している。この中に焼畑や焼山畑が含まれている点も興味深いが、また「はた」の中に、既掲の「山もとに畑焼く里の夕けぶり」という信実詠が見えることも、畑と焼畑の関係を暗示するであろう。或いはまた「やけはた」の項に、

人の住む里のけしきになりにけり山路の末の賤の焼畑（一〇一八八）

という前大僧正行尊詠が見られることも注意される。近藤潤一氏（『行尊大僧正―和歌と生涯―』、昭53、桜楓社）は、この歌を修行僧行尊の和歌世界が到達した、あわれ深い洗練の姿を示す一首と評されるが、西行が自身の先達と認識し

た行尊詠の中に焼畑詠が見え、後に西行自身も古畑という焼畑を自身の詠歌の中に詠み据えることになった事実を思う時、両者の等質性が焼畑という風景を通して見透かされ、興味深いものがある。

ところでこの西行だが、彼はまたもう一つの畑の風景を自身の作品の中に結晶せしめ、和歌史の上に別の足跡を残している。すなわち遠山畑という、畑を遠景で捉えた風景である。遠山畑は右に見る如く、『夫木抄』の中にも立項され、

あはれなる遠山畑の庵かな柴の煙の立つにつけても（一〇一八二／玉葉集二二三七）

という一首を収載するが、この遠山畑の先例は、『新古今集』（雑上、一五六二／西行法師家集二七二）の、西行の題しらず詠、

雲かかる遠山畑の秋されば思ひやるだに悲しきものを

の一首に求められる。下句に窺われる情感からして、これもまた古畑と同様に荒涼とした風景が思い描かれてよいであろう。久保田淳氏（『新古今和歌集全評釈』、昭52、講談社）は、当該歌の評において、「雲かかる遠山畑の住まいは、秋ならずとも寂しい。そこに秋が訪れたらどんなに悲しいことか、それに近い山住みの経験を有する西行は、その悲しさを実感できるのである」と述べられる。確かに西行の体験をふまえての詠であろうが、或いはこれも焼畑の景を想像すべきであろうか。焼畑の景観は、この遠山畑の風景にも適合し得るように思われる。そしてまたこの西行の一首は、久保田氏が指摘される「正治初度百首」の中納言得業信広詠、

夕立にをかだのわさほ露散りて秋風近し山畑の庵

という影響作をも生み出したが、それにとどまらず以後「遠山畑」は、既掲の『夫木抄』の順徳院詠の他にも、たとえば『草根集』の、

秋の田のよひの稲妻さよふけて遠山畑の雲に残れる（三四七五、田上稲妻）

雲うづむ遠山畑のなるこなは心引くともいかが知られむ（六四七五、忍恋）

の如く、好んで迎えられたのである。おそらくこの西行における遠山畑という用語と風景への着目と創出は、既述の好忠が好んで用いた遠山田という先例から派生したものと思われ、西行における好忠からの影響と考えられようが、ともかくも西行自身の山里に住む修行僧としての体験が、こうした用語の転用を可能ならしめたのであろう。畑の和歌史における西行の意義は、きわめて大きいと言わねばならない。

さてこうした「焼畑」や「遠山畑」の風景の他に、畑の歌として僅かながらも注目されるのは、個別の作物を詠んだそれである。既掲の『夫木抄』中の藍ばたけを詠んだ信実詠はその一例だが、何と言っても注意を引くのは麻畑であろう。麻畑を詠んだ例としては、

明けぬより手向にとりつ麻畠うねののいもの露も残らず（為尹千首、三一八、暁露）

の一首が見出されるにとどまるが、しかし麻に着目した歌は古くから見られる。中でも曾禰好忠はその家集中に、

114夏麻の下ばの草のしげさのみ日ごとにまさる頃にもあるかな（毎月集、四月中）

136我がまきし麻をの種をけふ見れば千枝に分れて影ぞ涼しき（同、五月中）

390桜麻のかりふの原をけさ見ればと山かたかけ秋風ぞ吹く（好忠百首、秋）

などと見えるほか、麻生（をふ）（三九五）の語も見えて、好忠は麻を詠むことにきわめて積極的であった。もっとも桜麻や麻生は、『万葉集』の、

桜麻のをふの下草露しあれば明かしてい行け母は知るとも（巻十一、二六八七）

の一首以下、多く詠まれた素材であったが、ともかくも麻は和歌史の上に畑の風景の一つを形成し得たと言ってよい。他に好忠には、「瓜植ゑしこまのの原」（一三〇）や「山がつのはてに刈りほす麦の穂」（一三五）など、畑の作物への著しい着目があるが、しかしそれらはさほどに和歌史的な意義を有したとは言えないであろう。僅かに麦が、麦秋の語に基づいて、たとえば、

218みそのふに麦の秋風そよめきて山郭公しのび鳴くなり（散木奇歌集）

のほか、いくつかの作品に詠まれた点が注意を惹くにとどまる。

他に畑の歌としては、

191嘆きそふをのと知らずや山賤のはた打つをのの音もせぬまは（肥後集）

の如く「畑打つ」の語が存したり、

174むかつらの畑のかこひの卯花や賤のさらせるて作りの布（為忠初度百首、仲正）

のような畑の卯垣に着目した歌が見える。同類のものとしては、「畑のかきね」（建久二年三月若宮歌合、十四番右、僧覚綱）、「畑のかきほ」（宝治百首、夏草、一〇二五、寂西）などが挙げられるが、それらは歌人たちの僅かな畑の垣への関心を示すにとどまっている。

従って畑の歌は、西行が歌語として創出した古畑、遠山畑といった用語及びその景観が、和歌史の上に一つのうねりを形づくった点と、また二、三の個別の品種に対して歌人たちの着目があった点とを評価し得ようが、総じて言えば畑という場は、和歌作品を創出せしむる場として豊かで実りある成果を齎し得なかったと言えよう。

五

以上、田の歌と畑の歌の特質について述べてきたが、右の如き概況を前にして、稿者にとっての最大かつ最終的な関心は、田と畑というきわめて類似した場が和歌という作品形式の中に表わされる時、なぜこのような差違が生じることになったのかという問題である。田も畑も、その生産性においてはいずれも等しい価値を有していたはずである。現在の農業史研究の成果を顧れば、従来の水田中心史観は着々と訂正されつつあると言ってよい。木村茂光氏（『日本古代・中世畠作史の研究』、一九九二年、校倉書房）は、畠地、畠作への評価を強調されるが、現に『万葉集』（巻十八、四一二二）の家持の雨を乞う長歌の一節には、

～そのなりはひを　雨降らず　日の重なれば　植ゑし田も　蒔きし畑も　朝ごとに　凋み枯れ行く　そを見れば～

と詠まれ、また『草根集』（九三八）にも、

よろづ民つくらむ田にも畑にもまく種ごとに実りさかへよ

と、田と畑は並列して詠まれており、その生産性においては田も畑も等しい価値を有していたのであった。それにも拘らず、なぜ和歌においては田の歌が豊かな展開を遂げ、畑の歌は二、三の個別のテーマにおいてのみ僅かな進展を示すにとどまったのであろうか。

そこには、右に述べた如き和歌と漢詩文との関連という問題が、根深く横たわっているのかもしれない。田の歌は畑の歌に比して、より豊かにそして明確に、漢詩文によって詠むべきテーマが与えられたと言ってよい。とすれば漢詩文との関係は無視されるべきではなかろう。しかしその漢詩文という視点からだけでは、右の設問に対する答は得られな

いように思われる。むしろそれは、その漢詩文においてさえ、田と畑との間に文学上の質的相違が見られるという事実を包み込んだ上で、考察されるべき問題ではあるまいか。詮ずるところこの文学における田と畑の問題は、おそらくそれが形づくる風景の問題に関わっているように思われる。田は夏から初秋にかけて緑一色に彩られた景観を呈し、秋に黄金色に変じて穂に実を結ぶという、きわめて画一的で明確な風景を形づくった。さらにそれは季節のサイクルの中にみごとに組み込まれ、歌集の四季部を構成する一テーマとしても文学的成長を遂げている。田は当然の如く、早苗と秋田という二つの段階において、その詠まれるべき時と場が確保されたのである。それに対して畑は、田のように明確な統一的風景を持ち得なかった。『延喜式』に見える作物を調査された古島敏雄氏（『古島敏雄著作集』第六巻〈第三章第二節、三作物の種類〉、一九七五年、東京大学出版会）によれば、当時の畑地で生産された作物は、穀類は小麦、大豆、小豆以下計一五種、蔬菜類は瓜、冬瓜、茄子以下計三二種、果実類は胡桃、栗、柿以下計五種に及んでいる。このように雑多な生産性を提供した畑は、翻って見れば風景として実に描きにくい場であったと思われる。そのために藍や麻のようないくつかの個別の種の畑が僅かに詠まれるか、或いは焼畑といった焦土とも言うべき作物の存しない荒涼たる風景が、いわば明確な景観を呈する畑として印象的に、西行の如き荒廃に鋭敏な感性の持主によって描き出されるにとどまったのだと言えよう。それは当然季節のサイクルにも組み込み難く、現に勅撰集においては畑は雑歌に分類されざるを得なかったのである。その意味において、畑は文学上の風景としては、その成長を遂げ難い場であったと想像される。

田と畑というきわめて類似した場は、その文学的風景においてはまったく異質の場であったようだ。そしてそれはまた、和歌という文学が何を詠もうとしたのかという、和歌の本質的な問題を考える上での恰好の場でもあったと言えよう。